平民哲學

111
571

第66
104

中國哲學

明治文庫

緒言

(一)哲學的に死の定義を下せば、生命の絶息と云ふ、神學的に定義すれば、原罪の責罰と云ふ、宗教的に定義すれば、靈肉の別離と云ふ、文學的に云へば、永遠の旅立、道德的に云へば、人生の終局、漢學者に言はせると、赴長夜臺だとか、爲黃泉之客だとか、逝去だとか、歸泉だとか、物故だとか、易簀だとか、種々の文字を用ゐて居る、和學者に言はせると、玉の緒が絶えるだとか、息の根が切れるだとか、無常の風が吹くだとか、草葉の露と消果るだとか、

彼世の人となるだとか、歸らぬ旅人となるだとか、樣々に形容して居る、西洋でも單に羅甸語のみを以て語つても、モルスだとか、フーヌスだとか、レートムだとか、インテリツスだとか、子キスだとか、ガビツスだとか、エギツスだとか、數へきれぬ程ある上に、之を形容するときにも、最終の日、必至の期、永遠の夜、長夜の眠、逆はれぬ運、免れぬ法、凶日、終刻などと牧擧に遑あらざる程ある。

然し私は之を平民哲學的に定義して、人間萬事の訣別と云はふと思ふ、人間萬事に別れるのである、父母にも、妻子にも、兄弟にも、親戚にも、朋友にも、敵にも、味方にも、赤の他人にも、富貴にも、歡樂にも、權位にも、世間にも、己れの身体にまで別れる、何が別れて往くかと云へば、哲學者の生命の元氣と云ふ者、宗教家の靈魂と云ふ者、吾人の常に精神と云ふ者が別れて往く、別れて何處へ往くかと云へば、現世から來世に往くことは言はでも知れて居る、乃で死と云ふことが明に分る、精神が人間萬事に訣別して、現世から來世に往くのである、自畫自賛のやうではあるけれども、一寸面白い定義ではあるまいか、

(二)昔から聖賢は死を種々に觀想して居る、希臘の聖賢ソクラテスだのプラトンなどは形骸を囹圄のやうに視做して居つた故、死ぬるのを脱獄若くは放免のやうに觀じたのである、羅瑪の學者シセロだのセネカなどは死は賢者を驚かさずと云ふ主義であつた故、之を一種の宿換若くは避難所のやうに觀じて居つた、漢學者なども死は歸なりなど云ふて居る、佛教者は往生と云ふ、基督教の聖人などになると誕生と云つて居る。故に同教では聖人の生(うまれ)は祝はないが、其死を祝ふ、死ぬる日が本統の誕生日所謂未來の永遠なる生命に生れると云ふ日だと云つ

て、年々之を祝ふのである、如何にも現世に生れ落るときは泣て出るので、且罪を背負つて來るので、其上涙の谷に出るのであるから、それも道理であらう、兎に角昔から聖賢は死を種々に觀じたものである。

然し私の觀じかたは、之と少し違つて悲觀的の方である、其譯は私は死を道德的教誨師として觀じたのであるから、勢ひ平民的の觀想でなければならない、死は我々に盛者必衰の理を教へ、會者定離の道を示し、人生の果敢なく浮世の味氣なきを曉して、善を勸め惡を懲し、德を勵まし慾を抑へる一種の厭世主義の哲學者であると

見たのである、此の觀想は餘り面白くはないが、道德上大に補益することは、誰も爭ふこと出來ないのである、本文は之を明に證據するであらうと思ふ。

聊か死に對する各種の意義と聖賢の觀想とを述べながら、私の意義と私の觀想をも陳べて、本書の緒言に充てたのである。

明治卅四年七月下浣

前田長太識

目次

(一) 死の教訓……一頁
(二) 死と富貴……九頁
(三) 死と歡樂……十二頁
(四) 死と權位……十五頁
(五) 死と人情……十七頁
(六) 死と體力……十九頁
(七) 死と容貌……二十頁

(八) 死と年齢……二十三頁
(九) 死と人生……二十五頁
(十) 死の觀念……二十七頁

死の教訓

前田長太著

本學生に我々の道德に大なる教訓を垂れる者ありとすれば、それは確に死であらう、死は古の道學先生よりも、今日の倫理學者よりも、我々の道德を奬勵するに力あるものである、學校の教員が生徒に如何程修身のお話をしても、會堂の牧師が信徒に如何程宗教上の說教を爲しても、又家庭の嚴父

が放蕩息子に如何程疊をたゝいて諫めても、効を奏することは洵に尠いものである、然るに死と云ふ道徳上の大辯士が出てくると、如何なる大惡人をしても一擧にして悔悟遷善の志を起さしむるものである、一基の墳墓を示し、一人の屍を指して、爾人間之を見よと云ふときには、如何程の惡人でも、成程と悟達くに至るものである、實に死よりも道徳の感化力の強きものはない、死は雄辯ある敎誨師であると云ふのは、此の意味によつて申された言葉である。

然し死と云ふものは人間の果敢なく、浮世の味氣なき敎

訓を垂れるもので、人生の悲しき方面をのみ我々に示すが故に、我々は其の敎訓を聞くことを餘り面白く思はない、眼前に死と云ふ幻影が顯はれ出でゝも、直ぐに之を打拂ふやうに務める、試に世の遊人に人生の果敢なき事と死の近きに在る事を語るならば、彼等は血相を變へて恐れるであらう、それは無理もない話である、地を匍ふ虫だも忌み嫌ふものは死であると申すから、彼の道徳家でさへも爾は塵である、塵より出でゝ塵に歸るであらうと云ふ言葉を聞くと、胸に五寸釘を打たれるやうな心地すると云ふから、況してや

俗界に在つて舞ひつ歌ひつして樂んで居る者の恐れるのは當然である、藝人社會の人間ほど死を嫌ふものはない、凡そ死に關するものは、皆不祥不吉であると云ふので、之を口にし、之を耳にするだも避けて居る、彼等は斯樣にすれば、死を避けた積りで居るけれども、然し決して夫れで避けられた譯ではない、死ぬときには矢張り彼等も死なければならない、死と云ふものは恐るゝ奴に限つて早く其の御見舞を蒙ると云ふのは、餘程面白い、想像では遁げた積りで居るけれども、實際では取捉まつて了ふ。

然し古の聖人の申す通り、死は哲學大全である、眞理を敎へ、道義を敎へ、謙遜を敎へ、敬虔を敎ふるものは、死である、大學校の先生方よりも立派な敎授をなしてくれる、我々は耳を傾けて其の哲理を謹聽しなければならぬ、我々の道德には益する所甚だ多いものである。

此の死と云ふ先生が一たび口を開て、人は死なゝければならんぞと言ふと、誰も之に抗抵する者はない、世間では抹殺博士などゝ云ふがあつて、歷史上の較明驗著なる事績をも抹殺して了ふ者がある、又彼の懷疑論者などゝ云ふ者も

あつて、明瞭的確なる眞理をも一種の夢のやうに言做すことがある、然し可笑いのは『爾は死ぬる』と云はれるとき、『否、私は決して死にませぬ』と主張する者が一人もないのである。

死なければならぬと云ふのは、世界萬民の諦めて居る道理である、大人でも子供でも金持でも貧乏人でも王樣でも乞食でも、此の道理に洩れる者は一人もない、昔秦の始皇帝が海上の仙人の處へ人を遣つて、不死の藥を尋ねたことがあるけれども、矢張り死んで了つた。

死せざる可からずと云ふ死刑の宣告は、世界一般の人類の頭上に下されて居る、世の有權者は罪人の頭上に死刑の宣告を下すけれども、死と云ふ者に逢ふときには、有權者其人も死刑の宣告を受けなければならぬ、人によつて此の宣告を受くる日に早いと晩いの區別はあるけれども、此の宣告を免るゝ者は世界中一人もない、盜し生きて居る者の死すると云ふのは自然の約束である。

試に眼をあげ、想を廻して世界の舞臺を見考ふるに、古來幾億千萬の人間が出沒隱見したか知れぬ、丸で役者見たや

うあ者である、種々の身分、種々の職分を以て、一時此世で藝を演じて居つても、直に死と云ふ樂屋に引込で了ふ、昔から隨分英雄豪傑の役割に當つた者もあるけれども、今は皆んあ墓所の塵を被つて休んで居る、宛轉たる蛾眉、美にして艶など丶云ふ女形も出たけれども、鬘を取つた後には見るもいやある骸骨とあつて了つたのである、兎に角世界開闢より今日に至るまで、老若男女、貴賤尊卑、種々樣々の人間が死の塚穴に這入つて了つた、今日地球上に千萬無量の人間が種々の役者とあつて立廻つて居るけれども、此が又皆んな

同じ樂屋に引込むのであると考ふれば、何とあく恐ろしい感覺がする、斯く言ふ私も之を讀む諸君も、共に同じ一つの塚穴、何と悲ひではあるまいか。

死あなければあらぬと云ふは、如何にも悲しい事には相違あい、けれども其處が丁度教訓にある所である、是より進んで死の人間萬事に就て語る教訓を一々謹聽してみやう

(二) 死と富貴

富貴何物ぞ、是れ唯子供の手遊にして居る玩弄品である、

死なるものは容易く之を奪取つて了ふ、如何にも不吉なる時が來て、諸行無常の鐘が響くときには、富を累ぬ、寶を積み、財産だの所有物だのを澤山にするが爲に苦心經營したとて、何の役に立つものか、死ぬる時は一錢でも持つて往くことは出來ない、塚穴に這入つて財産を何の爲に用ゐることが出來るか、之を溜るときには食ふ物も食はず、眠る目も眠ずに働き、雨に浴し、風に櫛り、東西南北驅廻つて溜めたものを、死と云ふ奴がくると一刻で失はなければならぬと云ふことは、辛い話ではあるまいか、生きて居る間こそ貪慾心が萬事

に向つて『持つて來い、持つて來い』と云ふけれども、死ぬるときには皆之を『遺棄て往く、遺棄て往く』と云はなければならない、誰に遺棄て往くのか、多分放蕩息子に遺棄て往くのであらう、忘恩の相續人に遺棄て往くのであらう、死んで了つた後には誰も考へてくれる者がない、去る者は日に益々疎しだから仕方がないと諦らめなければならない、死んで持つて行くものは腐敗つた屍と之を包む捲布のみである、然し土中の蟲虫が最早や爭論してそれを待つて居るとは情ない話である、千萬の富寶を蓄へても、鐚一文も持つて往く

と出來ぬと云ふ道理をよく味ふがよろしい、早く道德の寶でも蓄へる工夫をしないと、爾の生命は明日が日も知れないぞ、其時になつて富貴兩あがら得たりしが、今は一炊の夢となつて、こゝに從ふものとては一條の杖、一蓋の笠に過ぎずと云ふ歎きをなすも無駄であるぞよ。

(三) 死と歡樂

歡樂々々と云つて何がそんなに面白いのである、待て待て、死がくると直く悲哀に變じて了ふから、花街に遊び、青

樓に登り、酒を呼び妓を聘て、飲めや歌への大愉快を極むるを以て、人生最大の樂みとなすも、それが身體を弱め、氣力を殺で、死を早める道であると云ふ事を思はぬは、馬鹿の骨頂ではないか、今茲に斷頭場に引かるゝ罪人があつて、刑場に往く途中、笑つたり、歌つたり、舞つたりして居るのを見たならば、人は之を何と思ふであらう、萬人口を揃へて馬鹿である、狂者であると云ふであらう、然るに斯樣な馬鹿狂者は世間に斗量帚掃ほどもある、人生の道中に一歩一歩づゝ墳墓に近きつゝありながら、飲めや歌への馬鹿騒ぎとは何事で

ある、是れぞ眞に狂者沙汰あれ、實は此世は樂みの場所では
ない、涙の谷だと申す、又人生は泣て暮さなければならぬも
のである、それだのに世を面白可笑しく送らうなど、云ふ
ことは、大體了簡が違つて居る、然し此の道理を知らず、飽迄
も嬉しく面白き生活を送らうとする故、死と云ふものが來
つて『ドッコイさうはいかぬ』と頭から命令的に否殆ど壓制
的に押付けるのである、故に昔から世の歡樂を懲す一番良
い藥は死ぬると云ふ觀念であると申すのである、古聖ベル
ナルドの言葉に『爾若し肉情の樂みに引かされて、惡に誘は

るゝことあらば、直に死ぬると云ふ事を想へ出せ』と云ふこ
とがある。

〔四〕死と權位

死は世の權位を蹂躙るものである、爾如何に高位顯官に
登つても、位人臣を極むと云はれても、貴き天子たりと云は
れても、早晩其の顯要の位地を去つて、草葉の蔭に引籠まな
ければならぬものである、朝には登る旭の如く光り輝いて
も、夕には日西山に傾くと同時に其光は忽ち見えなくなつ

て了ふ、世界の權柄を握つて、其勢ひ飛ぶ鳥をも落す程の王様でも、最終には亡びて死の谷蔭に朽ち果てゝ了はかけれどもおらぬ、故に古書にも其驕は、天をも衝き、其頭は雲にも聳ふる程の勢でも、死すれば間もなく塵埃となつて了ふゆゑ、嘗て其の全盛の時の權勢を見た者は、塵埃となりたる跡を見て、昔の榮華今何處に在るぞと申すと云ふ事が書てある、實に世の榮華や、人間の權勢などは夢の如く消えて、遺跡も無くなつて了ふものである、斯の如く盛者必衰、驕者久しからぬ理を考ふるときは、位高く勢大なりとても、決して誇る

ものではない。

(五)死と人情

死は極めて無情なもので、親密なる人情をも忽ち摧て了ふ、如何にも死が入り來るときには、親兄弟も、親戚朋友も、下女下男も皆身を引て了ふ、恩愛の繋も切れて了へば、骨肉の親みも滅びて了ひ、刎頸の交りも、主從の關係も皆斷絶て了ふ、去る者は日に益々疎しと云ふは、マダ餘程可のである、多くは一たび棺桶に這入るや否や、直ぐに之を忘れて

永遠想出すと云ふことがあくあつて了ふ、時として涙を流してくれる者があつても、死んで了つた者の爲には、其涙は何にもならない、又其涙と云ふもホンの想出した時一時流れ出るもので、思念が他に移ると同時に直ぐ乾て了ふ、若夫れ之に反して同じ家の者が家督を相續したさに若くは一日も早く分産の日を見たさに、早く死にやがれあどと云ふやうなことがあれば、如何程なさけない事であるか分らぬ、是等の事を考ふるにつけても、人情の頼み難く、交情の當にならぬ事が明かである。

(六)死と體力

身體強健にして筋骨逞しきとて、威張ることは出來ぬ、死と云ふ剛の者は一刻で之を打折つて了ふ、強き者は摧け易いと申す通り、強い者程折れ易いものはない、實を云へば、人間の體格等は如何に肥滿して居つても、脆い玻璃器のやうなものである、動もすると直に破却て了ふ、死ぬるときには肥ひて居る角觝者でも痩て居る病人と違ひはない、違ひがあるとすれば、角觝者の方が強く倒れるといよふ丈けの話である、死に對しては體力は何にもならない、人と人とは相

撲を取ることが出來るが、人と死とは相撲を取ることが出來ない、直く倒されて負けて了ふ、故に世には死ほど強い者はない。

(七)死と容貌

紅顔の美少年だの、宛轉たる蛾眉などは、多くの人々を迷はせるものであるけれども、死の腕に懸けられた日には丸で滅茶々々である、生て居る間こそ美少年を形容して『面色白く鬚髪青く、眉は秀でゝ遠山の如く、眼は朗にして雙星に

似たり、隆準、圓唇、正に是れ一個の美少年』などと云ふ、又妙齢の小女を形容するときには『花の顔雪の膚、齒は瓢瓜の種子を並べたるが如く、姿は秋の夜の新月に似たり、沈魚落雁、閉月羞花の妙年二八の一佳人』などと云ふけれども、一たび無常の風吹き來つて死の御見舞にあづかるや否や、忽ち見るも淺間敷き姿となり、昔の俤何處に消せたかと思はれ、色即是空の理が眼前に現ずるのである、小野小町も楊貴妃も皆此理に洩れることは出來なかつた、西洋ではエザベラ皇后は絶世の美人であつたが、死して墓所に持つて往く間に、

早や皆朽ち果てゝ、之を持ち往けるカンヂ公ボルヂアのフランシスコは之を塚穴に入れる前棺の蓋を開て見た時一驚を喫して申すには『此れが我が優雅ある皇后樣の御遺骸と思はれやうか、其の美しき額、其の冷しき頰、其の愛嬌ある唇、其の光り輝ける眼は、今何處に在るであらう』とて、其心深く此感に打たれ、遂に世を捨てゝ法師となられたと云ふ事である、美顏麗容も死にかけられてはたまるものではない。

(八)死と年齢

我等は未だ年が若い、生れて間がない、行先きが長いなどと云ふ話は、死の前で許されぬ事である、老少不定と云ふ事は、年が若いなどと云はせないのである、死は年齢を顧ずと云ふ格言の通り、子供でも大人でも、青年でも老年でも、差別なく殺して了ふ、古人の申す如く、人間は土器のやうなもので、新ひものも舊いものも破却るに於て違はない、私はヤダ年が若いからと申すけれども、實は年が若いから尙危險と云はねばならぬ、情慾が激しい故、一層早く死を促すことが

多くある、古來夭折した者の例は枚擧に遑あらざる程ある、アドニアスも夭折をした、アブサロンも夭折をした、シケンの王の世子も夭折をした、若しアドニアスが放蕩をしなかつたあらば、モット生長をしたかも知れぬかつた、若しアブサロンが野心を起さず、父王に反逆あどを企てあかつたならば、如斯な變死をしあかつたであらう、シケン王の世子も其通りで、若しも不義の愛に引かされる樣あ事がなかつたならば、モウ少しは長く生きたであつたらうと思はれる、嗚呼天下の青年よ、爾の年齡を慎みにしてはならぬぞ、情慾を止める

か、死ぬるか、二つに一つである、古來素行が修まつて、道德の邪い者で夭折をした者はあいではあい、例へば顏回のやうあものが、ヤツ尠い方である。

(九)死と人生

人生とは何であるか、水の泡、朝の露、夢、影、風前の燈である と云ふ、榮華なる人生と云ふも、儼然き石碑の建てる墓のみ、内には醜骨擾亂して居る、長き壽命と云ふも、永遠に比べて

見れは一點にもあらぬ、認められぬ程の點である、過去は最早我々のものではない、現在も刻々我々を逃げて行く、將來は我々に知れぬものである、我々は彼のマトザレムの如く九百六十九歳も生きるとするも、一たび終に近いたならば、其間の生命は昨日の唯の一日のやうに考へられるであらう、果して然りとせば一日のやうな人生に重きを置いて、彼の業を企てやう、此の事を試さう、樂んでみやう、歡んでみやうあど、云ふのは、馬鹿々々しく思はれる、樂んだ所が一時、苦んだ所が一時と云ふときには、取るに足らなくなつて了

ふ、人生も生きて居る方から考へると、何かでありさうであるが、死ぬると云ふ方面から觀ると、何でもない。

(十)死の觀念

死の觀念は聖德に進む道である、哲人の言葉に、死は人生の定規であると云ふことがある、人間一生の行を誤らずに往くには、死をいつも眼前に立てゝ置かねばならぬ、死ぬるとき如何成るかと考ふれば、生きて居る時如何爲やうかと

云ふ道理が出て來る、昔から聖人賢人は皆此の觀念によつて其の一生の言動を律めたのである、我は死ぬるとき裸體で往くと思へば、富も寶も何にも要らぬくある、我は死ぬるとき北邙一片の煙とあると思へば、榮耀榮華の花を咲かして四隣を驚かすのも馬鹿々々しくあつてくる、我は死ぬるとき身體に蛆が湧くと思へば、六塵の樂欲を逞うしやうあると云ふ念もあくあつて了ふ、故に死の考を起すと直ぐに聖人とある、賢者とある、大哲プラトンの『聖賢の一生は死の觀念に在り』と云ふ言は實に名言である。

死の觀念は罪惡を避ける道である、古經に『爾の終局を考へよ、永遠罪を犯さいらん』と云ふ言葉がある、死ぬるときには王樣も車夫も金持も貧乏人も知者も愚者も皆んあ一つの土にあつてしまふと考ふれば、傲慢の罪あどは起りもしない、死ぬるときには金銀寶玉田地田畑何んでも皆んあ遺して往くと考ふれば、貪欲の罪も消えて了ふ、死ぬるときには美男子も美婦人も才子も佳人も共に臭氣紛々たる腐骨に化して了ふと考ふれば、淫欲の罪も容易く避けることが出來る、凡て皆此の通りで、如何なる罪惡でも、如何ある情

慾でも、死の觀念に皆打拂はれて了ふものである。

述べ去り述べ來つて爰に到れば、死ほど世道人心に補益するものはない、死は實に道德の大辨士である、世の敎育家の能はざる所、宗敎家の能はざる所、道德家の能はざる所、死獨り之を能くするとは、何等の勢力ぞ、聊か記して以て世の愚夫愚婦の哲學としたのである。

平民哲學 **死** 畢

明治三十四年七月十五日印刷
明治三十四年七月廿二日發行

定價四錢五厘

著者兼發行者 東京市京橋區新富町七丁目八番地 前田長太
印刷者 東京市京橋區築地二丁目十八番地 河本龜之助

賣捌所
神田錦町一ノ十 三才社
銀座二ノ九 大倉分店
神田雉子町 岡崎屋書店
本郷元富士町 田中書店

新刊廣告

前田長太編

哲人之人生觀 全

定價五錢　郵稅二錢

本書は青年の讀物として編ぜられたるものにして、羅列の賢哲の人生觀を紹介したるものなり、其の說く所、人生の出所、短價、無常、煩惱、輪廻、虛僞、苦難、終局等所謂人生の全般に亙れり。

前田長太演

神學斷片 地獄 全

定價五錢　郵稅二錢

本書は學者の試物として書されたるものにして、明確なる神學的議論を以て地獄の存在、苦罰、及び苦罰の特性等を議論したるものなり、著者は神學の一節を抜き、之に添ふるに古來

有名なる醫學者の著書を以てせり。

岡田良太著

公教演說 救靈 全

定價四錢
郵稅二錢

本書は公教信者の讀物として、談話体に讀りたるもの、行文平易にして且假名附きなれば、何人も讀み得べし、其の演ずる所は人には不滅の靈性あり、之を救ふの道を講ずるは、人生第一等の義務なりと云ふに在り。（右三書一纏め郵稅二錢）

賣捌所

東京市神田區錦町一ノ十 三才社

東京市京橋區築地三ノ九 大倉分店

東京市麹町區麹町町三 岡崎屋書店

特66
104

平民哲学　死

国立国会図書館

007889-000-1

特66-104

死（平民哲学）

前田　長太／著

M34

AAA-0059